
(3) 性感染症定点把握対象疾患に関する動向

鹿児島県感染症発生動向調査委員会委員
鹿児島大学大学院医歯学総合研究科泌尿器科学分野
教授 榎田 英樹

令和5年1月から12月における鹿児島県内16定点からの性感染症4疾患の患者報告数は、(1)性器クラミジア感染症716人、(2)性器ヘルペスウイルス感染症122人、(3)尖圭コンジローマ87人、(4)淋菌感染症390人であった。報告数の合計は1,315人であり、令和3年の報告総数974人から341人(35.0%)増加し、令和4年の報告総数1,180人からは135人(11.4%)増加し、尖圭コンジローマを除く3疾患において報告数が増加していた。特に性器ヘルペスウイルス感染症は昨年比で23.2%増であり昨年に引き続き高い伸び率であった。淋菌感染症は昨年比17.8%、性器クラミジア感染症も昨年比10.2%と増加した。また尖圭コンジローマは昨年比で13.0%減であった。

(1)性器クラミジア感染症は *Chlamydia trachomatis* が原因微生物の性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎、骨盤腹膜炎などを発症する。令和5年の患者数は、令和4年の650人から66人(10.2%)増加し716人であった。月別の報告数は令和3年、令和4年と比較すると3・4・5月に報告数が増加していた。累積定点当たりの報告数は全国平均の1.4倍で推移した。年齢層別の比率をみると、7年連続で20～24歳(31.4%)、25～29歳、30～34歳の順に多く、これらの3年齢層で全体の約63.0%を占めていた。また15～19歳における患者数は57人で前年比15人増であった。15歳～29歳の性器クラミジア感染症患者417人は4性感染症全体の31.7%を占め、同年代での男女比は2.1:1で男性の比率が高かった。保健所別報告数では、川薩、姶良、鹿児島市の順に多く、3か所で全体の約87.0%を占めた。

(2)性器ヘルペスウイルス感染症は、単純ヘルペスウイルス(herpessimplexvirus: HSV, HSV1型又は2型)の感染により発症する。令和5年は122人が報告され、令和4年の99人から23人(23.2%)増加した。全体の男女比は1:1.5で4性感染症の中で唯一女性の比率が高かった。年齢層では20～44歳の患者が74人と全体の60.7%を占めていた。月別の報告数は3月が最も多く、次に7月が多かった。累積定点当たりの報告数は全国平均の0.8倍で推移した。保健所別報告数では、鹿児島市が64人と最も多く、全体の52.5%を占めた。

(3)尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス: HPV)の感染により、性器周辺に生じる有疣状腫瘍である。令和5年の患者数は87人であり、令和4年の100人より13人(13.0%)減少した。男女比は6.9:1と圧倒的に男性で多く見られた。年齢層では20～44歳の患者が70人と全体の80.6%を占めていた。月別の報告数は、6・7月がやや多かった。累積定点当たりの報告数は全国平均の0.8倍で推移した。保健所別報告数では鹿児島市、姶良の順に多く、併せて全体の95.4%を占めた。

(4) 淋菌感染症は *Neisseria gonorrhoeae* による性感染症であり、男性では尿道炎、精巣上体炎を、女性では子宮頸管炎や骨盤腹膜炎を発症する。令和 5 年の淋菌感染症の患者数は 390 人であり、令和 4 年の 331 人から 59 人 (17.8%) 増加した。月別の報告数をみると以前みられていた夏季に限って多い傾向は認められず、月別の報告数は、定点あたり 2.0 人前後で変動は少なかった。また令和 3 年、令和 4 年と比較して 7 月と 10 月を除くすべての月で報告数が増加していた。累積定点当たりの報告数も多く、全国平均の 2.5 倍で推移した。保健所別報告数では、始良、鹿児島市、川薩の順に多く全体の 92.1% を占め、特に始良からの報告は全体の 50.0% と突出していた。年齢層別には 15 歳～29 歳の年齢層が全体の 57.9% を占めた。男女比は 4.7 : 1 と圧倒的に男性で多く見られた。

令和 5 年の性感染症発生動向の特徴は、尖圭コンジローマを除く 3 性感染症においてそれぞれの報告数が令和 4 年と比較して増加し、4 性感染症全体としては 4 年連続の上昇となった。定点あたりの患者数 82.2 人は平成 16 年の 95.3 人以来の高い水準となった。4 性感染症すべてにおいて 20 歳～29 歳の比率が 30 歳～39 歳の比率と比べて高かったこと、4 性感染症の一つ尖圭コンジローマにおいては前年と同様に女性の比率が 12.6% と性感染症 4 疾患の中では最も低かったことであった。また全ての性感染症において、15～19 歳の感染総数が前年比で 52% と急増したことから、未成年者の感染動向について注視しなければならない。前年に引き続き、性器クラミジア感染症は川薩保健所、淋菌感染症においては始良保健所からの報告数が最も多かったことが地域的な特徴であった。

鹿児島県の性感染症発生状況の年次推移と疾患別男女比について：平成 11 年から令和 5 年の 4 性感染症全体の 1 定点あたり報告数の年次推移を見ると、令和 5 年は 82.2 であった。令和 4 年は 73.8 であったので 11.4% の増加となり、過去 3 年上昇傾向にあるので今後の推移を注視したい (図 1)。全体の男女比は 2.9 : 1 と男性の比率は近年の統計では最も高くなった。性器クラミジア感染症と淋菌感染症の男女比はそれぞれ 3.0 : 1, 4.7 : 1 であった (図 2)。平成 27 年までは性器クラミジア感染症の男女比が等しいことが鹿児島県の特徴であったが、8 年連続で男性患者数が女性患者数を上回り、男性の比率が年々上昇している。性器クラミジア感染症は女性患者が多いとする厚生科学研究班の全国サーベイランス報告や全国総数の男女比とは異なった結果であり、本県の性感染症の特徴として今後も動向の監視が必要である。



図1 4性感染症の年次別定点当たりの報告数

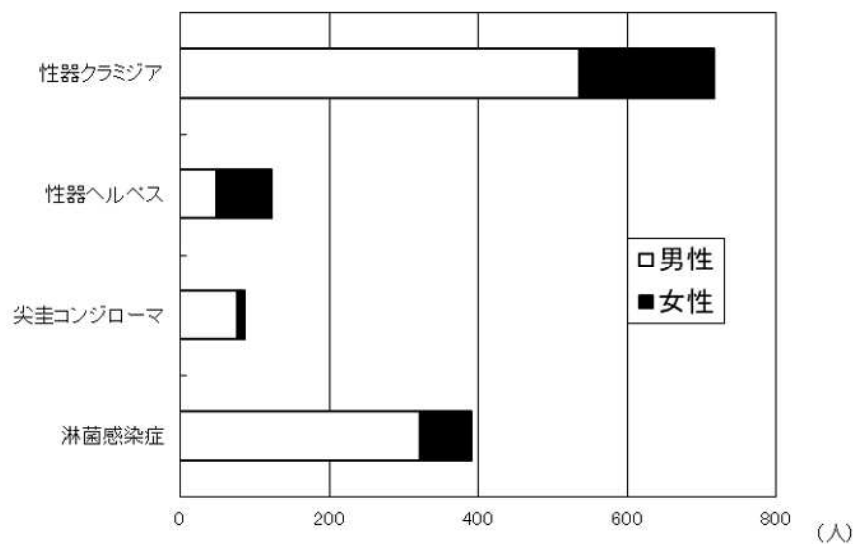


図2 令和5年の性感染症の疾患別男女別報告数(鹿児島県)

23)性器クラミジア感染症

(定義) *Chlamydia trachomatis* による性感染症である。

令和5年の性器クラミジア感染症は、性感染症定点医療機関から716人(累積定点当たり報告数44.75)の報告があり、令和4年(650人)より66人多かった。月別報告数では、5月(78人)が最も多く、前年よりも更に高値で推移した(図2-23-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(44.77)は全国(31.77)の約1.4倍であった。すべての月で全国の定点当たり報告数を上回った(図2-23-2)。年齢別では、20～24歳(31.4%)、25～29歳(18.9%)、30～34歳(12.7%)の順に多かった(図2-23-3)。

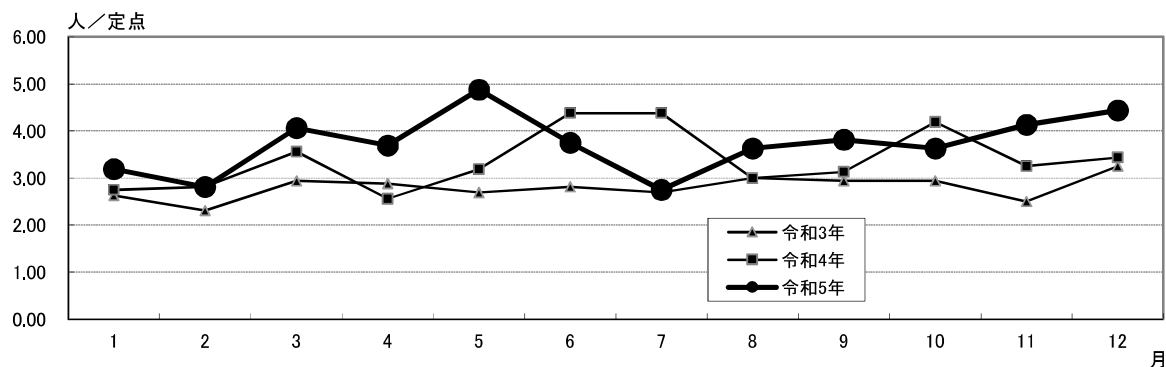


図2-23-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

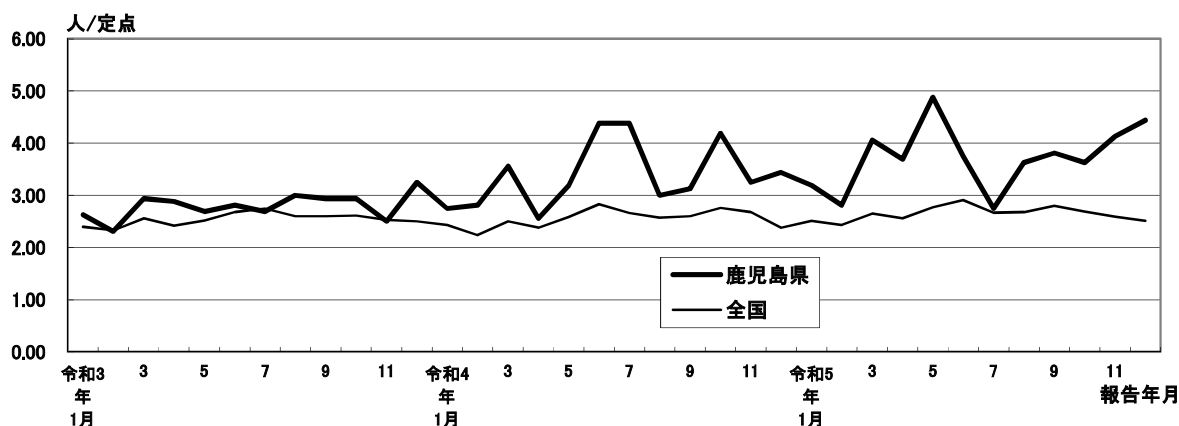


図2-23-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

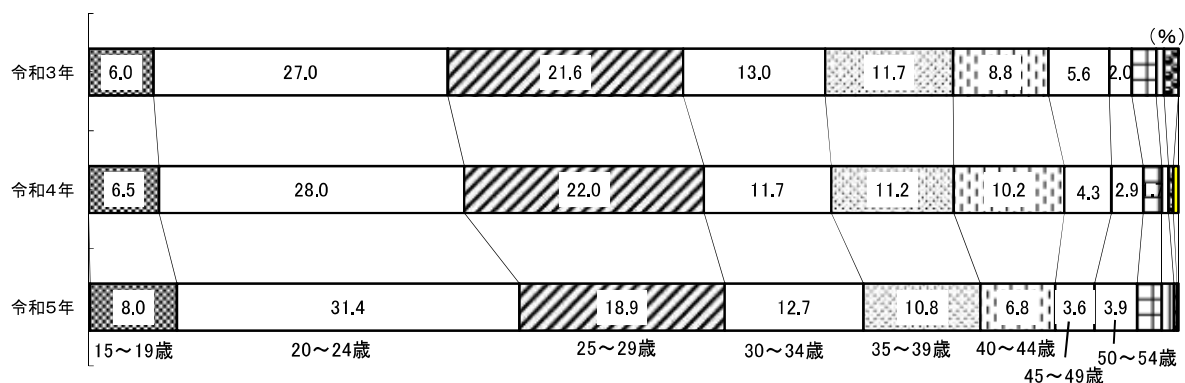


図2-23-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

24)性器ヘルペスウイルス感染症

(定義) 単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus:HSV, HSV1型又は2型)が感染し、性器またはその付近に発症したものを性器ヘルペスという。

令和5年の性器ヘルペスウイルス感染症は、性感染症定点医療機関から122人(累積定点当たり報告数7.63)の報告があり、令和4年(99人)より23人多かった。月別報告数では、3月(17人)が最も多かった(図2-24-1)。累積定点当たり報告数をみると本県(7.63)は全国(9.61)の約0.8倍であった。3月と7月は全国の定点当たり報告数を上回った(図2-24-2)。年齢別では、20～24歳、25～29歳、30～34歳(それぞれ13.9%)、45～49歳(10.7%)、35～39歳(9.8%)の順に多かった(図2-24-3)。

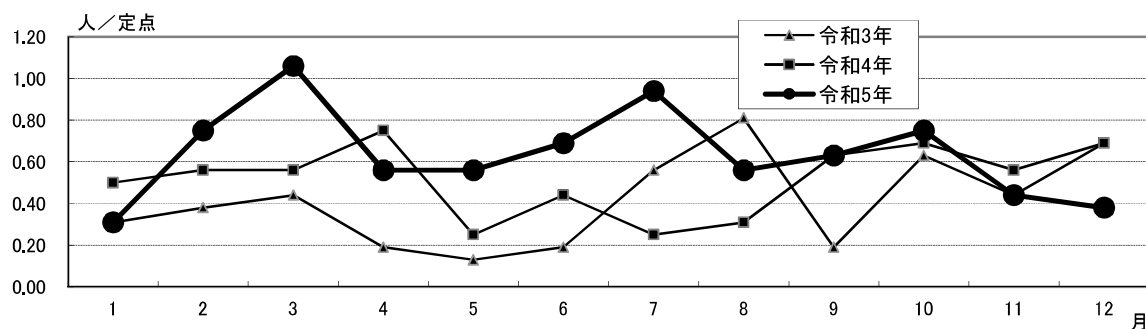


図2-24-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

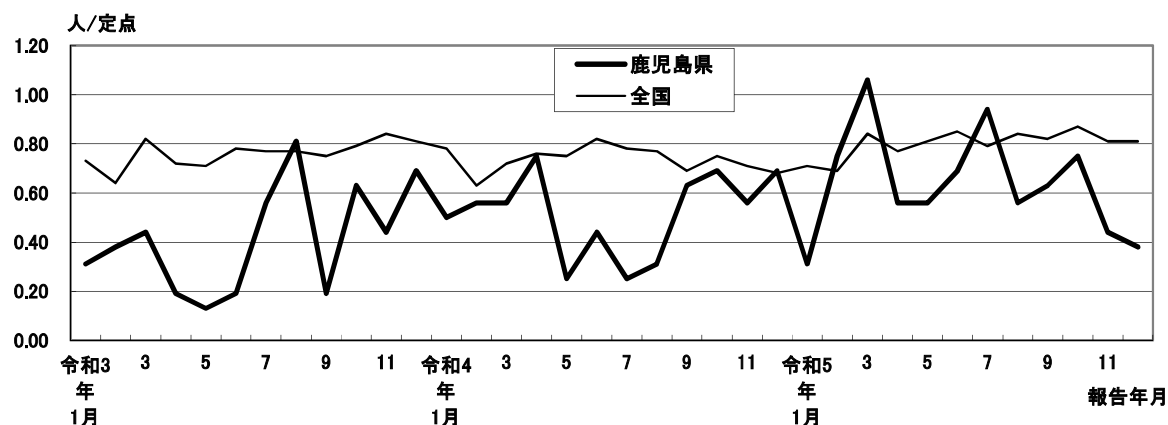


図2-24-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

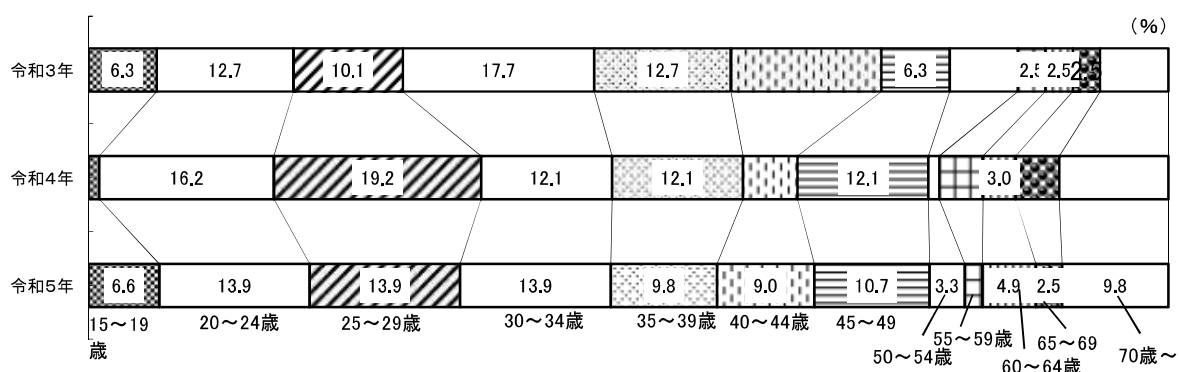


図2-24-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

25)尖圭コンジローマ

(定義) 尖圭コンジローマは、ヒトパピローマウイルス(ヒト乳頭腫ウイルス, HPV)の感染により、性器周辺に生じる腫瘍である。ヒトパピローマウイルスは、80種以上が知られているが、尖圭コンジローマの原因となるのは、主にHPV6型とHPV11型であり、時にHPV16型の感染でも生じる。

令和5年の尖圭コンジローマは、性感染症定点医療機関から87人(累積定点当たり報告数5.44)の報告があり、令和4年(100人)より13人少なかった。月別報告数では、6月(11人)が最も多かった(図2-25-1)。累積定点当たり報告数を見ると本県(5.46)は全国(6.74)の約0.8倍であった。2月、3月、6月、7月は全国の定点当たり報告数を上回った(図2-25-2)。年齢別では、20～24歳・25～29歳(それぞれ20.7%)、30～34歳(13.8%)、35～39歳・40～44歳(それぞれ12.6%)の順に多かった(図2-25-3)。

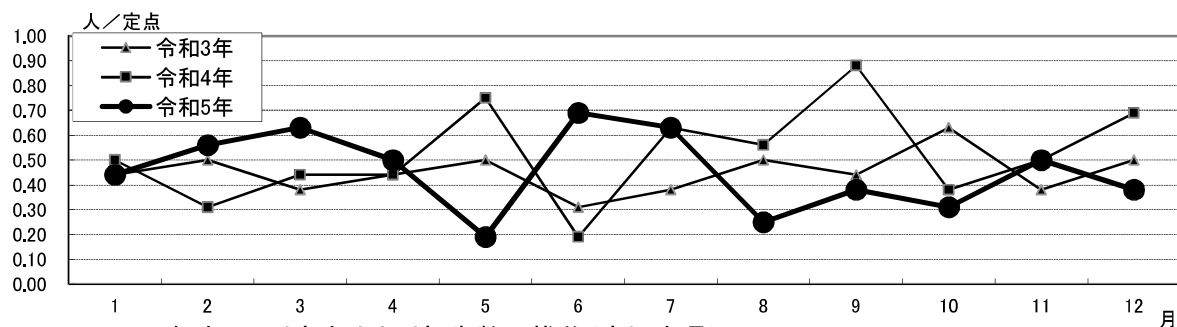


図2-25-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

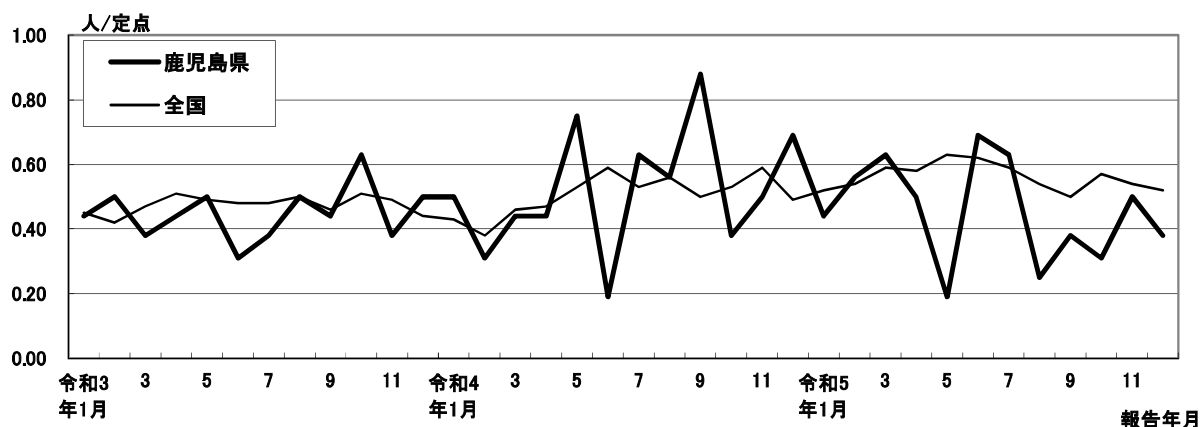


図2-25-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

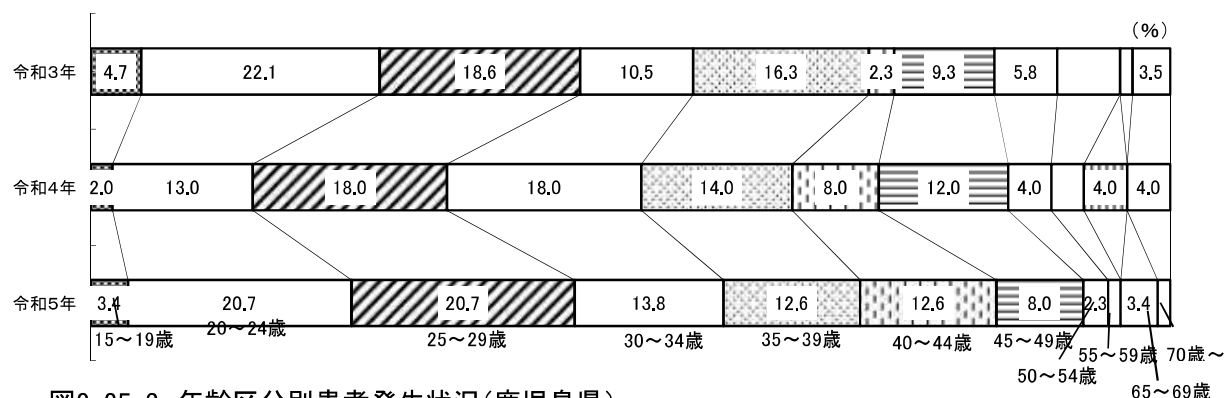


図2-25-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)

26)淋菌感染症

(定義) 淋菌(*Neisseria gonorrhoeae*)による性感染症である。

令和5年の淋菌感染症は、性感染症定点医療機関から390人(累積定点当たり報告数24.38)の報告があり、令和4年(331人)より59人多かった。月別報告数では、5月(39人)が多く(図2-26-1)、累積定点当たり報告数をみると本県(24.39)は全国(9.82)の約2.5倍であった。すべての月で全国の定点当たり報告数を上回った(図2-26-2)。年齢別では、20～24歳(30.0%)、25～29歳(19.7%)、30～34歳(13.3%)の順に多かった(図2-26-3)。

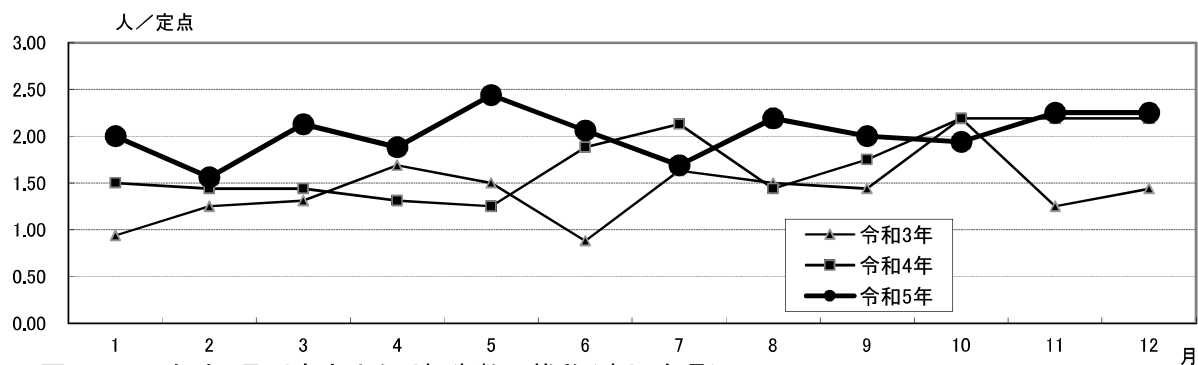


図2-26-1 年次・月別定点当たり報告数の推移(鹿児島県)

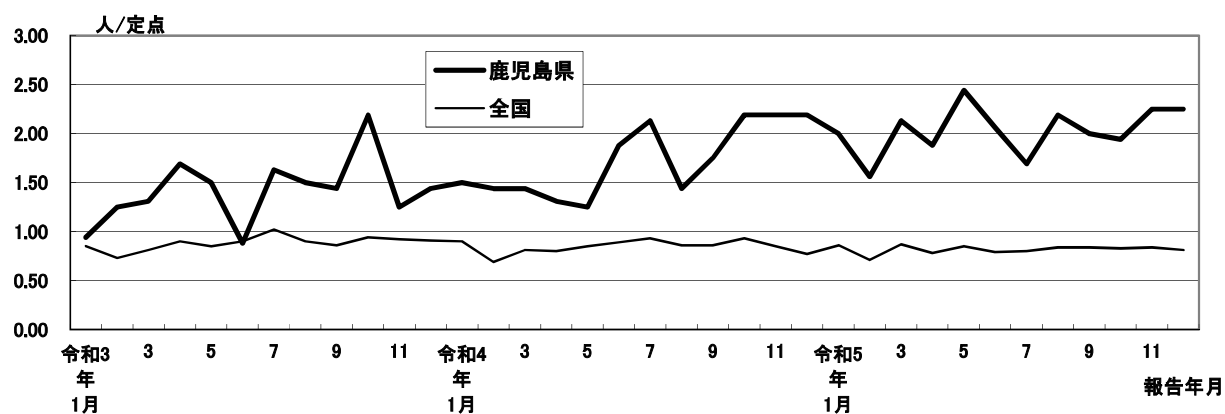


図2-26-2 定点当たり報告数の推移(鹿児島県, 全国)

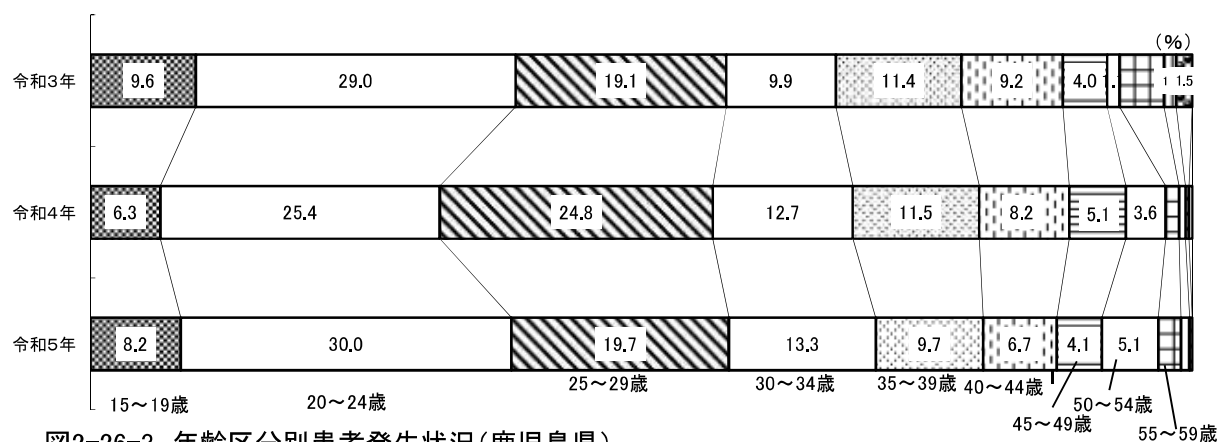


図2-26-3 年齢区分別患者発生状況(鹿児島県)